

道南太平洋海域スケトウダラニュース

令和6年度 第3号 2025年1月29日

地方独立行政法人 北海道立総合研究機構

函館水産試験場 調査研究部

TEL : 0138-83-2893 FAX : 0138-83-2849

令和6年度道南太平洋スケトウダラ産卵来遊群分布調査（3次調査）結果

函館水試試験調査船「金星丸」により行われたスケトウダラ資源調査の結果をお知らせします。

- ・ 調査期間：2025年1月18～21日
- ・ 調査海域：道南太平洋の水深50～500mの海域（図1右上）

- ・ スケトウダラの海域平均反応量は、昨年同期を大きく下回った。
- ・ 魚群反応の強い海域は胆振沖（白老沖及びむかわ沖）。
- ・ 反応の強い水深は100～200m付近。
- ・ 胆振沖（水深150m）及び渡島沖（水深210m）でトロールを行った結果、胆振沖では体長（尾叉長）40～50cmの成魚が主体であったが、渡島沖（水深210m）では、同20～25cmの未成魚が主体であった。

1. スケトウダラとみられる魚群は、渡島～日高海域にかけてみられましたが、とくに胆振沖の185漁区（白老沖）及び173漁区（むかわ沖）には比較的強い反応がみられました（図1・2）。
2. 渡島沖から胆振沖にかけての平均反応量は、昨年同期を大きく下回り、過去最低水準であった2017～2019年度（2016年1月～2018年1月）をやや上回る程度となりました（図3）。
3. 魚群反応は、表層付近からみられましたが、その中でも水深100～200m付近に強い反応がみられました（図4）。また、胆振沖（H～K線にかけて）の陸棚上（水深100m前後）には、海底に着いた反応の他に海底から離れて浮いた反応もみられました（図2-2）。
4. 胆振沖（地球岬沖）及び渡島沖（鹿部沖）においてトロールによる漁獲調査を行った結果、胆振沖（水深150m）では、体長（尾叉長）40～50cmの成魚が主体となっていました（漁獲物の重量比で約9割）、30cm前後及び20～25cmの未成魚も混じっていました（図5上）。また、渡島沖（水深210m）では、成魚は少なく、尾叉長20～25cmの未成魚が主体となっていました（図5下）。
胆振沖で漁獲された成魚については、成熟状態も調べましたが、メスでは既に完熟卵（水子）まで成熟が進んだ個体の割合が高くなっていました（図6）。

なお、今年度のスケトウダラニュースは本号で終了となります。

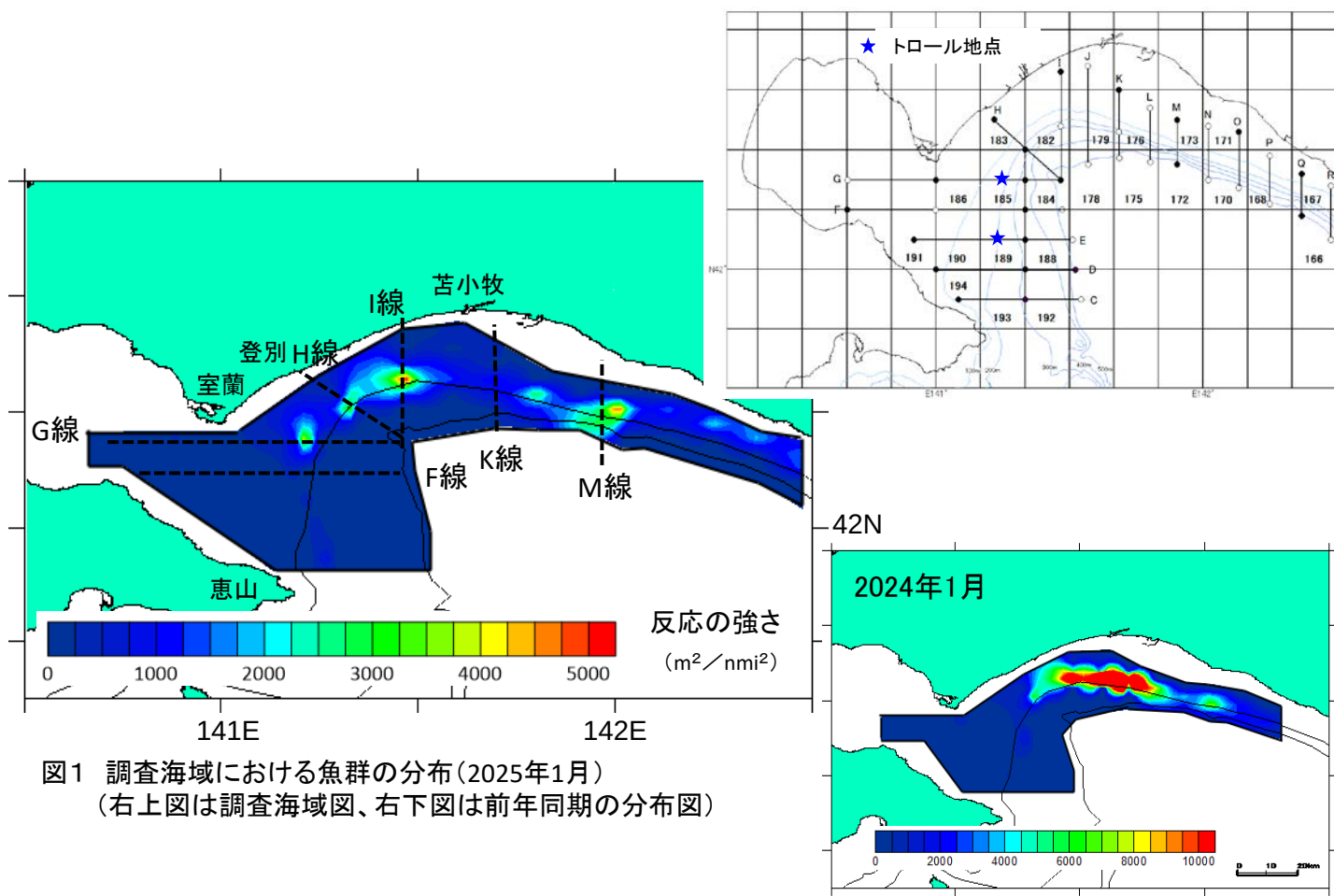


図1 調査海域における魚群の分布(2025年1月)
(右上図は調査海域図、右下図は前年同期の分布図)

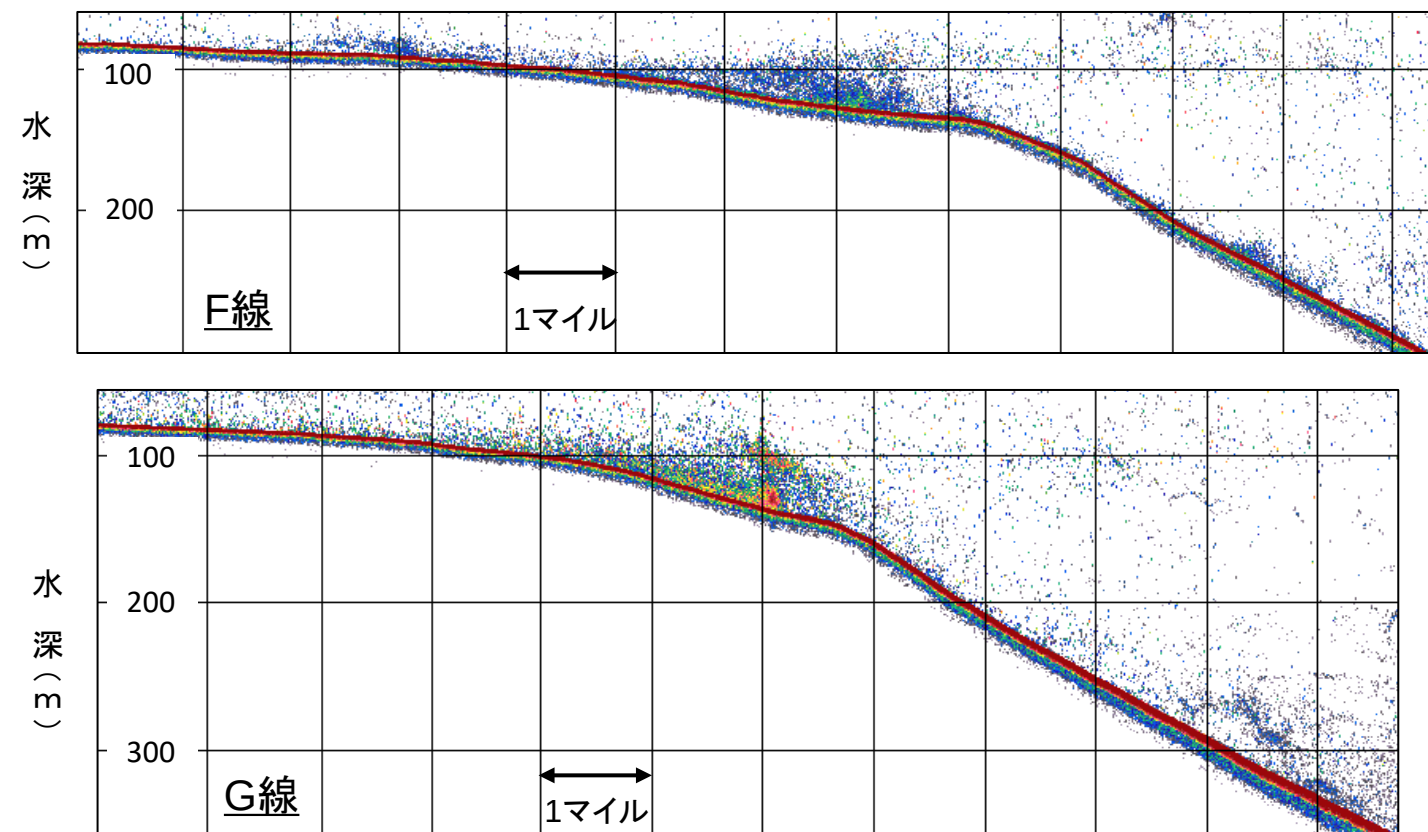


図2-1 魚群の分布状況(計量魚探画像)

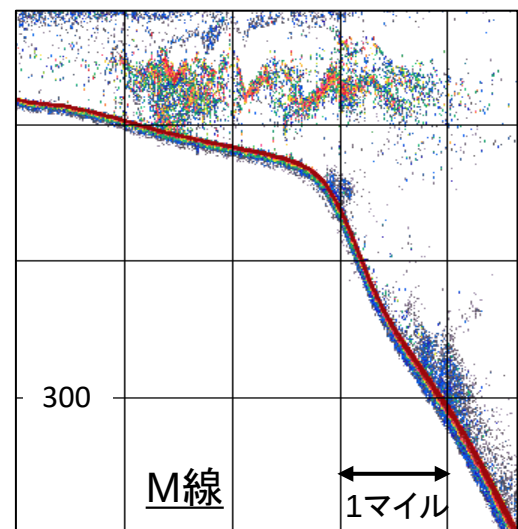
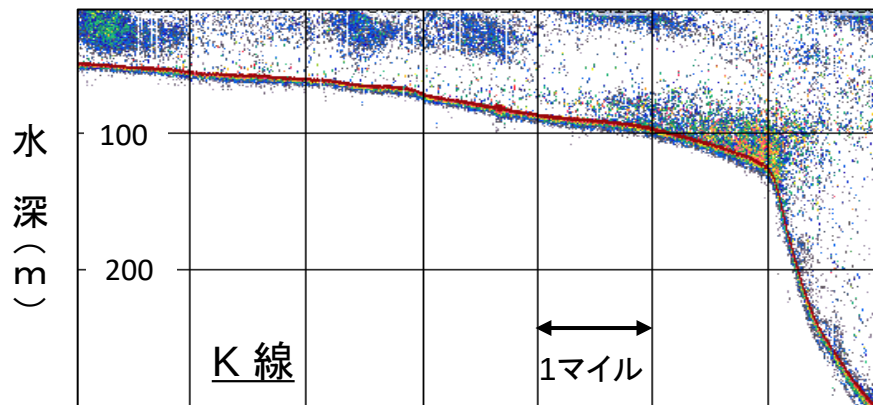
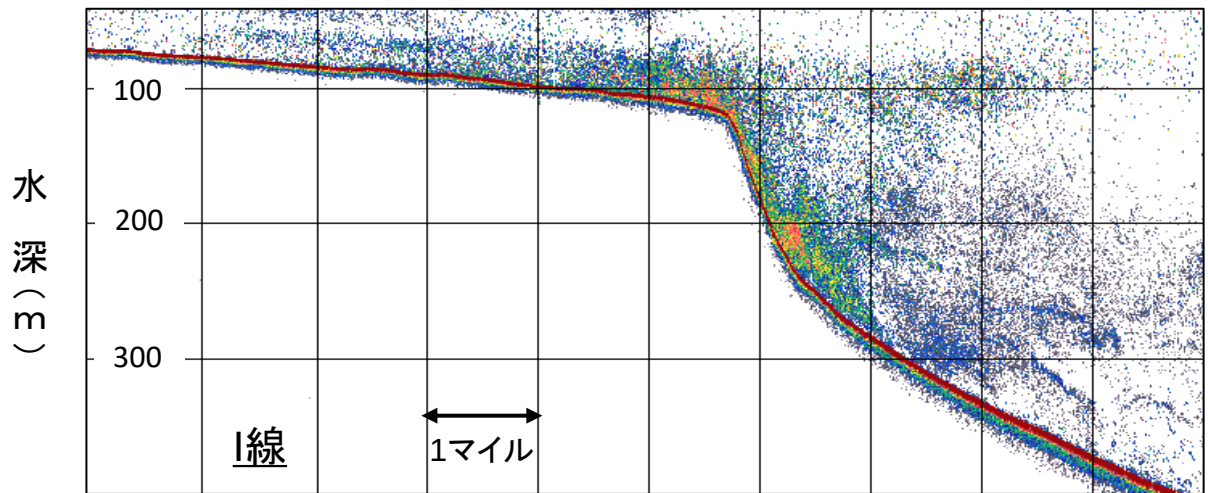
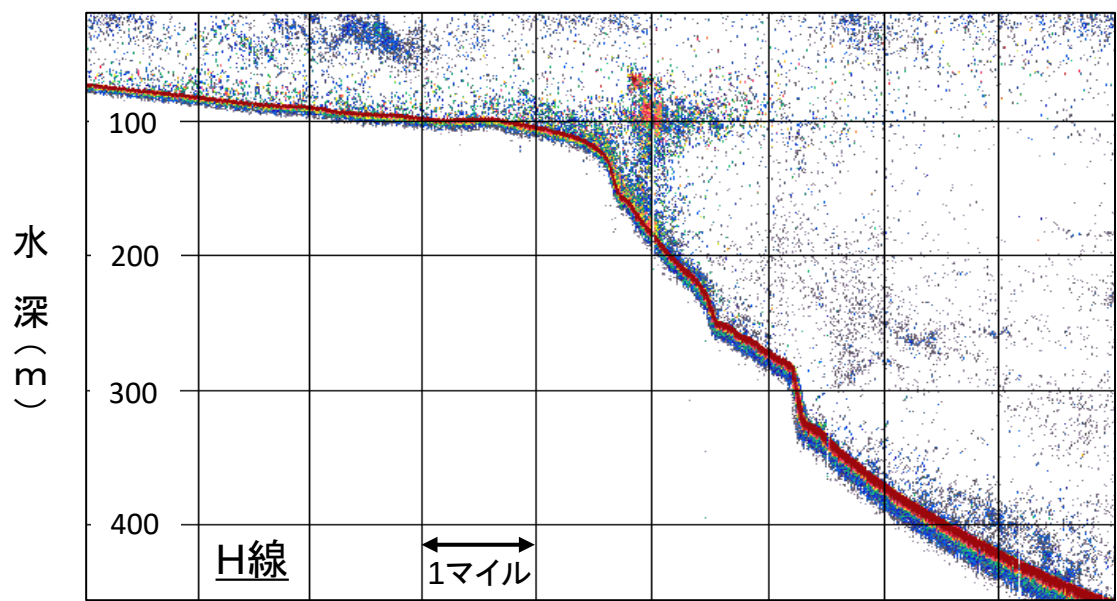


図2-2 魚群の分布状況(計量魚探画像)つづき

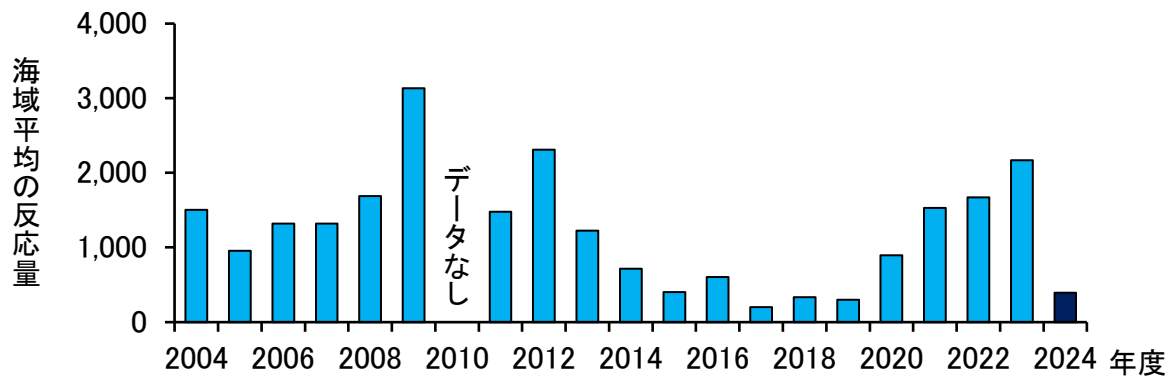


図3 調査海域における魚探反応量の推移

